

家庭教育応援企業研修会

日 時：令和元年12月2日（月）13：00～14：00

協力企業：税理士法人ケーエフエス

株式会社ケーエフエス

株式会社 KFS ライフ設計

演 題：「子どもたちのより良い成長を願って
～自己肯定感を育む親のかかわり方～」

講 師：福島県学校教育相談員 山本和宏氏

主 催：福島県教育委員会

各学校で、授業参観時等に、PTA対象の研修を実施していますが、仕事の都合で職場に戻らなければいけなかったり、父親の参加率が低かったり、学校での研修会に参加しにくい場合も多いようです。そこで企業内での研修会を実施し、より多くの方々に家庭教育の啓発を図っていくことを目指し、本研修を設定しました。また、ケーエフエスの社内アンケートでは「子どもの個性の伸ばし方」「自己肯定感の形成」に関心が高いことが分かりました。そこで、本テーマを設定し、より良い家庭教育の啓発を行うこととしました。



【講演の内容】

◇ はじめに

- 座右の銘「とにかく楽しく！」
- 人生は一度。迷ったらゴーの気持ちでぜひとも「チャレンジ」してほしい。

(1) 子どもたちの現状（○要因 ◎一般的傾向）

- 少子化→ 以前は兄弟の中でもまれて育つこと（学ぶこと）が多かった。
- 核家族化→ 身近に相談する人がいない。
- 情報化→ 現在とても大きな問題である。SNSによる事件・トラブルが絶えない。

○ 人間関係の希薄化と地域の教育力の低下

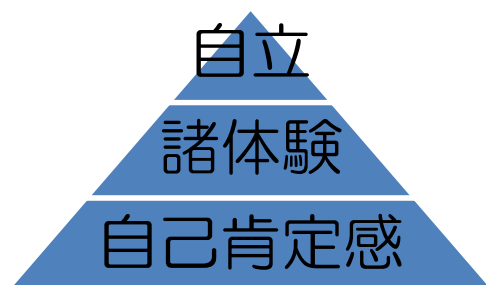
→ かつての育成会ではほとんどの子どもが集まった（現在は希望参加が多く、減少傾向）。地域の関係性は子どもの成長に大きく関わる。地域の行事に参加することから得られる学びは大きい。家庭ではしつけ、学校では学力・社会性、そして学んだ要素を地域で伸ばしていきたい。

◎ 抑うつ化傾向→ 三無主義から四無主義へ。無気力、無責任、無感動に無表情が加わる。（気力・意欲の著しい低下）

- ◎ コミュニケーション能力不足
 - 自分から友達を誘えない。「お母さん、あの人と遊びたいから誘って。」
 - 4人で遊んでいても、2人は対戦ゲーム、後の2人はカードで遊ぶ。
- ◎ 遊びの変化→ 外で子どもが遊んでいる姿をあまり見かけなくなった。
- ◎ 言葉遣いの乱れ→ 「先生、トイレ!」（酔っ払い言葉）を「先生、トイレに行ってもいいですか。」と正しく直させる。「この前も言ったでしょ!」という言い方はよくない。繰り返し教えることが大切。
- ◎ 自己中心的
 - 「自分さえ良ければ」という風潮がある。自分がされていやなことは人にはしない、言われていやなことは人には言わないということを、子どもに必ずしておくこと。親であっても、上から目線ではなく同一目線で言う。その子の視線に合わせて語りかける。「110cm（1年生の平均身長）の視界」。
- ◎ 睡眠相「何時に寝て、何時に起きるか」の未確立
 - 睡眠不足から不登校になってしまうケースが多い。小学生に必要な睡眠時間は9時間ぐらいである。生活のリズムを作っておくことが大事。
- ◎ 食事の変化
 - 食事の時、親子で語り合える時間を1日1回はもちたい。食卓の座る場所を時々ローテーションすることも効果的。

(2) 自己肯定感（自立への基盤）をはぐくむために

- ① 自己肯定感⇔自己否定感
 - 自己肯定感の高い子は「家族にとって、自分は大切な存在だ。」と自覚している。
 - 頑張れる、チャレンジできる子になれる。
 - 自己肯定感の低い子は、親からほめられたり認められたりした経験が少ない。
- ② 自己肯定感を育む親のかかわり方
 - 子どもを自立させることが親の責任である。



- 信頼関係の構築が大前提である。家庭では、親は子どもの話を真剣に聞くこと。手が離せないときには、一段落したら親から子どものところへ行くように心がける。親が気分に対応していると、子どもはそれを見抜いてしまう。
- 子どもを正しく知る。食べっぷり、遊びっぷり、付き合いっぷり（「3つのぷり」）をよく見る。
- 父性（ビシッ）と母性（フワッ）のバランスをとる。一人二役も出来る。
- 自己決定場面の意図的な設定を大切にする。
 - 例 キャンプでの朝食（セレクト方式）
 - 「牛乳**で**いい。」から、「牛乳**が**いい。」といえる子にしたい。自分で決めて、言葉を発する経験を大切にしてほしい。
 - 例 宿泊学習での野外炊飯
 - 与えられたメニューで失敗すると、人のせいにする傾向が高い。しかし、自分達で決めたメニューで作ると、失敗しても文句を言わない。（カレーのルーが薄かろうが、濃かろうが、文句を言わずに食べる。）

- 出番（家庭の中での役割分担）を大切にしたい。新聞取りのようなちょっとした手伝いでよい。「ありがとう」と感謝の気持ちを伝えることで、「自分はこの家でなくてはならない存在なんだ」と子どもは感じる。
 - 自力解決力を育てる。
例 「〇〇ちゃんにけられた」
→ 良くない対応は、「じゃあ、お母さんが言ってやるから」とすぐに親が出る。
→ 良い対応は、よく話を聞いて、事実を確認する。そして、自分はどうしたいのか本人に考えさせる。
 - チャレンジの機会をあたえる。日本式の「頑張り」ではなく、外国式の“You can do it!”（大丈夫、君なら出来る）で励ますと、自立のための礎となる。
 - 積極的に良さを認める。普段の子どもの様子をよく見ていないと、良いところ探しは出来ないもの。「親（先生）が見ていてくれた。」ということが子にとって大きな喜び・意欲づけになる。
- ③ 望ましい躰
- 叱るときは、子どもが納得できるように叱ること。
 - 「やっぱりおまえか。」という決めつけはよくない。
 - 子どもは全力で生活している。前のことは忘れてしまう。だから、前のことを持ち出して叱っても意味がない。
 - Aはだめと言っているのにAをやる、Bと言うなと言っているのにBと言うなど、二重メッセージにならないように。「『ばか』って言ってだめでしょ、ばか。」と言ったり、「叩くなって言っているでしょう。」といいながら叩いたりしてはいけない。
- (3) 学校・家庭・地域の連携
- 地域の行事、イベント（自然の家など）へも参加してほしい。
 - 個性の本来の意味は「キャラクター（性格）」である。その子に向いていることを見つけて伸ばすこと。だから、小さい頃からサッカーばかり、バスケットボールばかりではなく、他のスポーツも経験できる機会を与えたい。
- ◇ おわりに
- 親自身が自己肯定感を高め、じっくりと子どもと関わる。親がゆとりをもたなければ、子どもの自己肯定感は育たない。
 - 焦らずに、自信をもって、比べず、あきらめず子どもと関わっていききたい。



【研修後の懇談より】

研修後、企業代表者、講師を交えて懇談を行いました。

ケーエフエス代表の小島氏は家庭教育への造詣が深く、本研修会の主旨を十分にご理解いただきました。社員の皆様の参加方法や研修中の勤務形態などきめ細かくご配慮いただいたことで、実りある研修会となりました。

講師の山本氏もこうした企業様の姿勢に大いに共感され、本研修が社員の皆様への啓発につながることへの期待を述べられていました。